



# Meijo式 Junkoの充実

# 名城大学 準硬式野球部

指導に熱を入れながらも「講義の単位は落とすなよ!」と部員に呼び掛ける樋口監督(左)と今村専任コーチ



## 樋口流が育む 社会で通用する万能選手

日本の大学野球で盛んに行われているのが準硬式野球だ。ボールの見た目は軟式球だが、硬さや打球の飛び方、弾み方が硬式球ほぼ同じ。ルールや用具などは硬式と同じというメリットから、高校野球の経験者も多い。

県内の大学の準硬式野球チームは東海地区準硬式野球連盟に加盟する。中でも1部リーグ所属で、現在春季リーグを戦っている名城大学にも、毎年多くの学生が入部する。県内の準硬式チームでは唯一の専任コーチという今村圭佑(30)の存在もあり、3月から4月にかけて行われた東海地区選手権では4強入りした。

野球漬けの生活になりがちな硬式に比べ、準硬式は野球と勉学の両立を図りたい学生に適している。名城大学でも練習は週4〜5日。時間は主に午前中で、大半の部員が午後から授業やアルバイトに励む。樋口義博監督(39)は毎年のように全国の高校の硬式野球部監督に「両立」に重きを置く指導方針を熱弁し、多くの高校生をスカウトしてきた。就任時は部員10人前後だったチームが、今では例年100人近い大所帯となった。

両立を徹底するためのルールも設ける。「勉強ができない人間は野球もできない」と、単位が取れず留年した部員は退部させる方針を貫く。

主将の藤井勇輔(3年)は「楽しく野球に打ち込んでいる。バイトや資格を取る勉強など、自分の時間も多く取れる」と充実ぶりを強調する。飲食店でのアルバイトに加え、小学生時代に所属した名古屋市内の少年野球チームでのコーチも始めることになっている。「子どもが好きなので、何か関わられる仕事に就けたら」と話す。

硬式からの転向で花が開いた選手もいる。エースの水谷大輝(2年)は、津田学園高校(三重)時代はベンチ外だったが、名城大学では変化球主体の技巧派投手として主戦を任される。オートバイのメンテナンスや学習塾の

講師のアルバイトもこなしながら、在学中に検討しているアメリカへの留学費用をコツコツと貯めている。「野球も勉強も、大学生のうちに行いたいことをやりたい。人間的に大きくレベルアップできれば」と話す。

クリーンアップを打つ神谷賢志郎(2年)も元高校球児。「違う自分を見つけられるのでは」と準硬式の門をたたいた。

グラウンド内外の時間が充実するからこそ、社会への船出に備えて幅広い選択肢が生まれる。樋口監督は「勉強や資格取得、アルバイト等、大学時代にしかできない経験も多い。社会に出た際に『野球しかできない人間』と言われることがないようなことを経験させたい」。社会が必要とするユニティティプレイヤーを育てている。



準硬式野球への転向で、充実した大学生活を送っている(左から)神谷賢志郎、キャプテンの藤井勇輔、水谷大輝